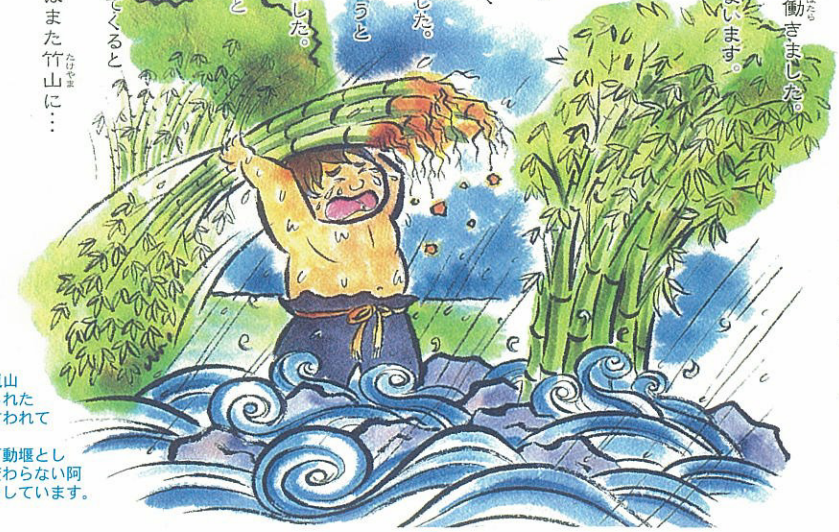
なばの泣き堰（阿蘇の民話）

昔、阿蘇の村に"なば"という、たいそう力持ちの若者がおりました。
ところが不思議なことに、その力はなばが大声で泣かないと出すことができないものでした。
ある時村では、近くの川に堰を造り、水が少なく困っている隣りの村へ水を流す計画を立てました。
二つの村人たちは朝から晩まで汗水流して働きました。
そんなある日の朝、村は大雨に見舞われてしまいます。
今まで造ってきた堰が流されては一大事。
村人たちは、ずぶぬれで必死に働きました。
ところがなばを見ると、みんなが働く様子をぼんやりと眺めるだけ…怒った村人たちは、
「力があっても、なん役に立たん」と、罵りました。
なばは「おらぁ、ぎゃんこつもできんとか」と思うと悲しくなり、クスンクスンと泣き出してしまいました。
とうとう「わーんわーん」と大声で泣き出すとそのまま近くの竹山に走り出しました。
なばは、両脇に太い竹を何本もかかえて戻ってくると
その竹を川に打ち込み、大石を投げ込んではまた竹山に…
何度も何度も川と竹山を往復したのです。
見る間に堰は完成し、溜まった水が隣り村へ向かう水路に流れ始めました。
「なばが泣いて堰を造ったぞ！泣き堰じゃ！」村人たちはたいそう喜び、
以後、この堰を「なばの泣き堰」と呼んで永く親しんだそうです。



このお話は、黒川の上流、小嵐山の前を流れる「鹿漬川」に造られた小嵐山堰がその舞台であると言われています。
この堰は平成５年に近代的な可動堰として改修され、今もなお当時と変わらない阿蘇の青い空を、その水面にうつしています。

農村地域では
農業の営みによって
豊かな生態系が
形成されています。